

江戸における木戸・番屋の成立と機能

— 絵画史料を中心に —

波多野 純

はじめに

- 一 都市施設としての木戸・番屋
- 二 文献史料にみる木戸・番屋の形成過程

論文要旨

都市施設としての木戸・番屋 近世城下町を都市として捉える指標のひとつに、都市施設の計画的建設と継続的な維持管理をとりあげたい。戦国期の京都には、上京・下京それぞれを囲む構や木戸門が設けられた。

文献史料にみる木戸・番屋の形成過程 慶長一四年（一六〇九）漂着したドン・ロドリゴの記録に、江戸には町ごとの木戸があり治安が維持されたところがある。ところが、他の文献史料によれば、町人地の木戸は、寛永六年（一六二九）あるいは同一二年に、初めて建設された。町触における初見は、慶安元年（一六四八）で、「町中之門」と「町之番所」が設けられた。享保の改革期、火の見櫓の設置が定められた。このうち自身番屋上のものを「棹火の見」と呼ぶ。

絵画史料にみる木戸・番屋の様相 出光本『江戸名所図屏風』の木戸は、いずれも都市と外界との境界にある。歴博本『江戸図屏風』では、通町通りの町ごとの木戸とともに横町の木戸も整備されている。享保期の浦部家本『江戸図屏風』の日本橋北詰には木戸と番屋があり、消防の梯子と櫓が備えられている。絵画史料によれば、江戸の木戸は、まず都市域と外部を区画し、やがて町ごとを区切るように建設された。その仕様からみると、町人自らが建設した木戸が、後に公式化した可能性がある。

- 三 絵画史料にみる木戸・番屋の様相

- 四 絵図にみる木戸の分布

おわりに

絵図にみる木戸の分布 最初に木戸が確認できる江戸図は、延宝七年（一六七九）『江戸方角安見図』で、通町通りと本町通りに木戸が示されている。二本の通りに限って木戸が描かれる状況は、その後も踏襲される。しかし、実際には裏通りや横町にも、多数の木戸が設けられた。通町通りと本町通りの木戸のみが重点的に描かれたのは、この二本の道を江戸のメインストリートとして認識させる必要性からである。

おわりに 初期の江戸における木戸は、京都に倣って、都市域と外部の境界に設けられた。その後、木戸の治安維持装置としての役割に注目した幕府は、木戸を公的な施設として認め、防火等の役割も担わせるようになる。

いっぽう、木戸は幕府の権威の表現としても意識された。つまり、江戸が全国絵城下町として、整然と幕府の管理下にあることを、外国使節や諸大名に誇示しようとした。通町通りと本町通りの格別な扱いが、そのことをよく示している。

やがて、町人に維持管理が委ねられた木戸・番屋は、夜間の通行規制、棹火の見や消防用具を備えた防災警備、町奉行所が行う町行政の末端機能、さらに町内自治の事務所など、その機能を拡張し、重要な都市施設として確立した。